

水産海洋地域研究集会

仙台湾の環境と漁業
- 沿岸域の底魚資源を中心として - 速報

上原伸二・笥 茂穂(水研セ東北水研)・高橋清孝(宮城水研セ)・南 卓志(東北大学)

標記地域研究集会は、2007年7月5日に東北大学農学部キャンパスにおいて、水産総合研究センター東北水産研究所および宮城県水産研究開発センターとの共催により行われた。参加者は試験研究機関、大学、行政部局を中心に83名であった。

主催者からの挨拶後、開催趣旨説明を兼ねた仙台湾底魚研究のレビューが行われた。この中で、仙台湾では1960年代から1970年代にかけて、国際生物学事業計画(IBP)の「北方冷水海域における生物群集の生産に関する総合的研究」に代表される組織的な研究により、多くの知見が集積されてきたことが紹介された。次に、本研究集会のメインプログラムとして、現在仙台湾で行われている水産海洋学的研究と底魚資源管理の事例報告が3つのセッションに分けて行われた。

セッション1では、仙台湾の海洋学的特性に関して2題の報告があった。宮城県の浅海・沿岸定線調査をもとに、仙台湾が明瞭かつ安定な季節変動を呈する典型的な沿岸海域の特性を有していることが示されるとともに、水質・底質環境調査から、近年、貧酸素水塊の発生が多発化していること、およびその発生要因に関する検討結果が示された。

セッション2では、底魚類成育場としての仙台湾に関して3題の報告があった。ヒラメ・カレイ類の仔魚研究事例から、浮遊期の動態を解明するうえで、沿岸域の流れを把握が不可欠であることが示された。着底稚魚については、分布や摂餌生態に関する知見が集積されてきているものの、成育場の評価手法の確立などは今後取り組むべき課題であることが指摘された。さらに、成育場環境を支える低次生産構造について、河口干潟域に関する解説が行われ、食物連鎖の出発点として底性珪藻類の重要性が示された。

セッション3では、漁業生産の場としての仙台湾に関して、3題の報告があった。まず、沖合の底魚資源に関して、近年、相馬沖のトロール調査により動向把握が可能になりつつあることが紹介された。次に、減少の著しいマコガレイについて、資源管理手法の検討が行われ、産卵場保護の有効性が指摘されるとともに、この知見に基づいた漁業者の自主的な資源管理の取り組み事例が紹介された。さらに、そこに至るまでの経緯について述べられ、科学的知見に基づいた資源管理が、漁業者の信頼関係の中で実現できたことが強調された。

総合討論で最も議論が集中したのは、海洋学的特性に関する部分であり、特に沿岸域の物理化学的海洋特性に密接に寄与する流動構造把握に関する研究の重要性が指摘された。さらに、漁業者との連携を重視して、仙台湾生態系の理解とそれに基づく資源管理に取り組む総合的な課題を立ち上げる必要性が指摘された。

